

雪はしきりに

秋沢陽吉

早曉、山陰からだしぬけに現出した太陽はその英姿を一瞬間だけ見せた。金と朱のまばゆい光彩を八方に放射する一刹那に全精力を集中したのだ。

昨夜は、年に一度あるかなきかの黒暗暗たる闇に深々と沈んだ。星明かりも流れる星の到来も一切なく、辺り一帯は深い闇にすっぽりと包まれた。

常闇そのものの夜は、自然の重圧下にある生物をことごとく呪縛から解放し、新たな内部を開かんとする拳に出た。生と死の深淵について観想するとぼ口に立たせる。世界の何たるかについて熟考する入口に導いた。

にもかかわらず、せつかくの好機を生かせぬまま朝を迎えた。いつも通りの空しい生の営みにまつわるせせこましい争いや、その果ての空疎な嘆息に貴重な時を使い果たした。

天空はいつしか真珠と指呼したい硬質な色調によつて、半円球の全面が覆われている。はるか高層では清澄な気流が下界に一触することなく悠揚と渡つていく。

岸边にうづくまる集落からは、対岸の山並の中央にでんと座る飛びぬけて高い山の山裾が目に入る。山のとつぺんには異色の森が古来から手つかずのままの姿を保持しているという。孤絶した山は見るからに高い。

片や、奥山の山峽を流れる広くて深い川や川岸にへばりつく寒村は、自身とどうにも折り合いがつけられずに不安を募らせ、早くも白々とした表情をみせている。

異色の山の登山口へと向かう駐車場に古ぼけた自動車が停止し、一人の男が現れた。間延びしたような空間の中にうつそりと立っている。村に独り移り住んで一年が過ぎたよそ者に違いない。若くもなく年老いてもいず何から何まで中途半端で影が薄い。とはいえ、痴者よろしくあんどりと開いた口元とは対照的に、眉間の深い縦皺の下で時折眼光が鋭いきらめきを発する。

昨夜もまた、思い悩む事柄のあれこれが男の心をいつぱいに占め、どうやつても濃霧の憂さが晴れずに悶々として過ごした。適量の制限を大幅に破つて多量の酒に手を出して酔いつぶれ、やつとのことです眠りを手にした。

悪夢が執拗に指差し続けた暗黒の前途がひどくこたえたらしく、朝を迎えても胸奥の傷口がふさがらずにいる。職員住宅の住人に、今週末もまた自宅に帰らない不自然さを見咎められたくはないとびくついている。たちまち落下していく、いたたまれない暗さから素早く脱出すべく部屋を飛び出した。

肩をそびやかして入口に立つサクラの大樹は、花盛りの美的な幻をちらつかせながら、初々しい青葉へと装いを変えた自身を誇らしげに顕示していた。

頭上を見上げては幾たびもほうと讚嘆の声を上げている。緑葉の種々相が開いて見せる諧調は実に見事で美しい。うるんだようなみずみずしさやつやつやした若々しさを惜しげもなく鮮烈にふりまいていく。

生き生きした活力が足先から頭のとっぺんまでを貫き、足取りは軽々としたものへと変化し、山の傾きを苦にすることなく上へ上へと登ることができると浮き浮きと弾む有頂天の階梯へとぐんぐん高まっていく。

ところが、暗転への予兆の如き小さなつむじ風が足元で巻き起こる。あきらかに異質な空気の流れを伴って異次元へと男を誘導していく。

何と、楕円の形をした地面の上方にぽっかりと広がる空間が出現した。その場所にだけ燦爛たる光のシャワーが降り注いでいる。

こことそっくりのドームの如き空間が故郷の裏山にもあった。どこにも遍在する同形の館跡なのだろう。

前方への歩みは止まっている。胸中では一大事に違いない嵐が吹き荒れる。遠い過去の大切な一端だ

けを、宇宙のどこかに置き忘れてきたかのような切迫した感情にとらえられてしまう。ついで、こもごもの情感がどつと雪崩落ちる。

追放されたも同然に男が妻とまだ幼い子供と新築の家を出てから、二昔になろうとしている。情けない格好で立つ古びて痛んだ山麓のその実家に老母は一人で住んでいた。父亡き後に墓参以外には決して家に近づかないと固く決めている。

少年であったその昔、同じ敷地内には村中にただ一軒しか残っていないみすばらしい茅葺の家が建っていた。雨漏りのする屋根の下でとぐるを巻くようにして父母と三人で暮らした。貧窮の底の底で、村人からは蔑視や軽侮といった底意地の悪い視線を浴びせられるばかりか、面と向かって嘲笑されることも度々あった。

母親は見境もなく他所の家に押し込んで始終喧嘩を吹っ掛ける。後おつかあと陰口を叩かれる十七歳も年下の妻を制御できずに鼻面をひきまわされる甲斐性のない父親。継ぎの当たただぶだぶのお下がりの服しか着せられたことのない、びくびくやおどおどの形容がいかにも似つかわしい憂い顔の少年。

戦時中の代用教員仕込みだと大威張りで宣明する、教育と称する母の攻撃が日夜ぶち当てられた。ささいな過ちを大問題とみなして難詰し、嵩にかかつて

攻め立てる。自分のやり方を闇雲に押し付けては全力で抑え込もうとする。泣きじゃくりながら捨て身の反撃を試みると、村人や級友といった観客がいる場面に引きずり出しては殴りつけ、真つ赤な恥辱の只中に投げ込むことさえした。

そうした暗すぎる日々の中で、母の嚴重な監視の目を盗んでは植物たちの美々しい輝きに巡り合おうと裏山に身を隠した。極小の翼を広げうつむいて咲く春の訪れをいち早く告げる高貴な薄紫の花。夏の夕暮れにはホタルを迎えようと釣鐘の姿をした可憐な花が開いた。紅と金が拮抗して交錯する天蓋の真下に立ち、黄金の莊嚴に胸をふるわせる。

誰にも邪魔立てされずに、稀有な一刹那をわがものにできた。憂苦を忘却できるわずかなひとときであつた。

時を同じくして、母親と一人息子の関係についてしみじみと思ひ詰める。あれほど冷酷無情な仕打ちをわが子にする実の母親がいるのか。やはり生きさぬ仲なのだ。どこからか貰われてきたみなしごに違いない。そう切々と得心する。

しかし、感傷的な追憶にひたつて停滞してはならなかつた。

暗鬱から逃れる瞬間へと回帰がかなう道理はない。

過去を追尾しそんな所に沈んでいる局面ではないと心底思う。

実のところ、正面から立ち向かうべき喫緊の難題に迫られていた。早急に対処しなければ取り消しのきかない事態を招く窮状に追い詰められている。

本来ならば、この県の最西端のこの地から最北端へと遠距離をもものともせず、昨晚のうちに高速道路を乗り継いで自動車を駆って自宅に戻っている。妻佐和子と二人の子供とでそれなりに楽しい団欒の卓を囲んでいるはずだ。

数週間前、勤務地へと向かう早朝に、「しばらくは、来ないでほしい」と佐和子は自宅への立ち入り禁止を唐突に夫に申し渡した。いつもならば夜半に出発するものを、たつての希望によつて共に朝を迎えたにもかかわらず。

まるつきり理由を明かすことのない一方的な命令が下された。当初は、心中に途轍もない荒波が突き上げてきて激しく逆巻いた。遂に卑劣な奴らに向けてお前は人間ではなく獣だと罵倒する醜い言葉を、佐和子の面影に突き刺した。次には、すがりつき懇請するように電話の受話器を手にしても、無音の返答によつて冷然と突き放された。

あれほどの曲折を重ねた末にようやく築き上げた至上ともいうべき大切な関係が、こうも易々と遮断

されてしまうのか。佐和子に寄せかけるかけがえのない愛着や子供たちへの慕わしい愛惜は妄念がこねまわした楼阁でしかなかったのか。ちよつとしたしぐさやつぶやき、また微笑みがまぎれもない愛情の返答だと思ひ込んでいた。

仕事の合間にさえもたちまち鉛色の暗雲に閉ざされていき、押しつぶされそうになる。鋭い切っ先を隠した夕暮れが淡淡と忍び寄る刻限を最も恐れた。とうとう、自宅に帰ろうと考えること自体が無理無体に闖入するかの如き想像が生じた。

手厳しく拒否されても、それは一時的ないさかいがもたらしたものでいずれば円満な終息へとむかうだろう。誰もが一度はそう考えるはずが、この男はその見解を思いつきさえしない。

赤の他人の格別深い意味を持たない言葉やしぐさのひとつをも、決定的な忌避を意味するに違いない、好意を全て失ったとまで思い悩む。年齢を重ねるごとに男の病態は重篤の度合いを増している。

内面深くを鋭角的にえぐる虚無の匂いのする根源的な不安。ひりひりするような孤なる意識が研ぎ澄まされはした。けれども、すつくと一人立つ自立が困難でしかない致命的な弱点を抱える。

本源を照らす金ぴかの輝きにはほど遠いものの、目いきらりと光を帯びた。

「しばらくは、来ないでほしい」。それは「しばらく」という時間に限定がついた立ち入り禁止なのだ。時が過ぎれば関係は修復できる。佐和子の言辞はただ一人の人だけに伝えようとするささやきに近いものではなかったか。二人だけの領域にのみ属する言葉に違いない。辛苦を重ねて築いた領土はまだ全てが失われてはいない。

さりながら、か細いつながりである電話や手紙のひとつさえ未だに届く気配はない。

巷間には容易く見出せない情理を兼ね備えた人物が、およそ浅慮とは正反対の冷静沈着な熟慮によって下した決断だと考えざるを得ない。

矢も楯もたまらずに出向くのは短慮からくる愚策に違いない。けれども、両手を上げて降参し手を拱いてむぎむぎと時間を浪費すべきではない。拒絶に至るまでの思考過程の深層までを解明しようとする発想が芽生えてきた。来し方を周密に検証する道筋が残されている。雑駁な堆積の中から砂金に変わり得るかけらを見出すことができるかもしれない。過去への後退戦でしかない営為に見えようとも、とりあえずは博大な空虚を埋めるしかない。

いてもたってもいられない焦慮に突き動かされた人間がベンチからよろよろと立ちあがり、ひよろつく足取りで歩きます。

上から直線的に降下する光線にくつきりとさらされ、悄然たる孤影は正視できないほどに痛々しい。

淪落の成れの果て孤独地獄に突き落とされて、粉々に砕け散った心の始末がつけられずにいる。

はるか上方から見下ろすと、草むらに転がる男の姿は地面にぽつんとついた黒い染みそつくりに映るに違いない。その異相の一点からは、周囲と隔絶したどす黒い強烈な違和を発している。近づくと、七転八倒の苦しみの末にやつとのことと眠りについた輩に見える。生まれて初めて悪夢を見せられた赤子が、小さな手足を苦しげに縮こまらせている格好に思える。

どうにも身動きできない難行苦行の泥濘にはまりこんでしまった。この林中に来て、不意を食らって蹴落とされた暗底部には、思いもよらない新たな難題が山積していた。問いを立てることにさえ難渋する紛雜が奇怪にからまりあっている。

職場の自席では始終あいまいな顔付きで、役立たず者の如く男はぼさつと座っている。だが何日前に直撃した電話がその男を恐慌そのものの混乱状態に叩き落とした。満身に傷を負い打ちひしがれて身動きができない人間を、さらなる困難だらけの深い穴に放り込む。行きつ戻りつしていた視線は、さな

がら死に行く人のように中空で停止した。

容易ならざる事態が逼迫しているのではとうろたえている。とうとう母は何重もの自重の壁を突破して一線を越えた。悪辣で決定的な行為にまで手を染めたのではないか。怯えがひしひしと迫る。不安感と恐れがごた混ぜになって心中を侵食していく。

男の氏名に肩書までくつつけて、職場に直接電話するよう警察官に使囁したのは母であった。困り事相談の担当者は、警官とは思えぬよどみなくなめらかな口調で説得を試みた。実家の天井裏にハクビシンが何匹も住みついて巣を作った。退治する費用に加えて元通りに修理する経費が入り用だ。ついては、幾許かのまとまった金額をお母さんに融通してはもらえまいか。家庭の内情にまで踏み込んだ要請は職掌を逸脱している。また一人、母の策謀によつて仕立てられた手下がうごめいている。

かつかつの生活を支える息子からの送金は滞り、食うや食わずの苦しい明け暮れだ。隣家に子や孫が集うなごやかな宴をうらやみながら、侘しい思いで眺める毎日。やつとのこととで三度の飯の支度をし、たったひとりで味気ない食事を終えて、寂しく眠りにつく日々はどれほど悲しくて辛いものか。

こうした粗造りに拵えた穴だらけのお涙頂戴話であつても、哀れを誘いたつぷりと同情心を呼びさま

すことができる。泣きわめくといった錯乱をも取り入れた老母の一人芝居を男は手に取るように想像できた。裏側には息子を引きずりおろさんとする痛罵の連射が張り付き、身内の腸をも食いちぎる加虐的な醜態をさらしている。

母の暗躍は数段階格上げされた。老親をほったらかしにする息子の行状を勤務者を管理する組織中枢に訴えると脅迫している。こつそりと値踏みされて人物評価が地の底に落ち、就いている地位と職業を根こそぎ奪われてしまうのではないか。

悔しさとも腹立たしさともつかない、ひどく胸糞が悪い情動がまたもや湧きあがってくる。電話で聞き取る最中に、本当はハクビシンはいなかったと老母担当のホームヘルパーは口を滑らせた。真つ赤な嘘で固めた攻撃に防戦一方で怒り狂った拳句に屈辱の窪みに落ち込み、決まってざらついた虚空をみつめる結末に追いやられる。

間違いなくこれまでの人生において経験したことのない厄介きわまりない未曾有の混乱に陥っている。林中には風の時間が訪れたらしい。どこかに清らかに澄んだ水が流れている。その場所の方角を指しすぎてくしゃくと歩を進める。前のめりの上体と足とがばらばらに動く。小さな泉がひっそりと息づいて

いた。やさしい緑の枝々が至福の影をふるわせながら、きらめく鏡面を一心に見つめている。

両親と同居するという驚天動地というしかない行動に踏みきったのは佐和子の存在があつてこそであつた。

息子が職に就く日に狙いを定め、母は資金に目途が立たない無謀な新築計画に突進した。就職したての細身にはとても背負いきれない、よろけるほどのあまりに多額の借金を強引に押しかぶせてきた。その昔、名主に次ぐ土地持ちの篤農家は後妻が相次いで引き起こす凶事が縁由となり、見る間に凋落していった。母は他家を羨み宿怨を積もらせ、いつか見返してやろうと傷だらけの怨念に雁字搦めになつていた。

父の方はさんざつぱら小突き回された人同然に見るかげもないほど消沈していた。わずかに残つていた山林も宅地の一部も手離さざるを得なかつた。新しい家の主の席に座つても相変わらず貧窮の底でもがいており、ぼろぼろになつた老体をさらしていた。

複雑な事情のことごとくを佐和子は染み入るように理解し、深い哀憐の涙を流した。収入も碌すつぽない老夫婦だけではやりくりが困難でも、身を寄せ合えば暮らしはどうか立つだろう。そう同居を申

し出たのは結婚したばかりの佐和子の方だった。

水仙が一斉に花開く日に、初子を抱いて三人揃って新しい建物に入居した。村中の穴ぼこに日が差し瞬時であつてもまばゆい輝きを見せた。何よりも、純粹に他人に尽くそうとする人の実在を初めて目の当たりにして心を打たれた。その得難いひとときをどれほど大切に抱きしめたのか、誠に心もとない。

同居してほどなく、どこの家族にも滔々と流れて途切れることのない細やかな親和や、他人には入り込む隙のない親密な情愛は、父母との生活には求めでも得られない空言に過ぎないと痛切に思い知ることになる。

嫁が立ち寄る家々を先回りし事実無根の発言を捏造しては吹聴して回った。母は村人と仲違いさせることだけに醜くく心を砕いた。冷たい拒絶にあつた帰り道、知り人の誰ひとりとていない村中の小さな十字路で、肩を落としてひとりぼっちでうつむく佐和子の痛々しい姿が浮かんでくる。赤子をひしと抱いて足早に家に戻っていく切ない後ろ姿を、取り返しがつかないこの時になってこの泉のほとりでありありと想像している。佐和子の心中は悲観にあふれ引き裂かれんばかりであつたらうと、初めてのように見詰めている。男の深奥までもが鋭い悲哀に切り裂かれ、いたたまれない様相でもがいている。

男が留守のある夜、穏やかな老爺の顔しか見せたことのない父が荒れ狂った。突然、「やつちまえ」と叫んで佐和子に襲いかかった。母が虚妄を刷り込み父を悪鬼に仕立てたのだ。

もはや打開策はなかった。

夫婦の関係を粉々に破壊して、息子を母にだけ貢ぐ下僕にする遠謀を佐和子はいち早く見抜いた。母との間には未来永劫にわたってあたたかなものが通い合う余地は全く存しない。けれども、父との関係を断ちきることは困難だった。老いて先細りになつて消滅しそうな父だけは、微力を尽くしてでも支えてやりたいという思いがいつからか胚胎していた。

そうした込み入った胸底をこまやかに解析し指摘しては、何としても家を出て新しい家庭を作ることが最も大切だと佐和子は事を分けて説き明かしてくれた。背中を押され手を引かれてやっとな家を出る決心がついた。

大昔のこと、母は先妻の子供を次々に家から追ひ払った。親類が鳩首協議して後妻をこそ追い出すべきだと骨を折って実行に移したのに、性懲りもなく駄々をこねて迎え入れたのは父であった。あんな性悪な不心得者のどこを気に入って低頭までして再び家に入れたのか。この重苦しい重量級の疑念は終生

父につきまといつた。

晩年には母の手の付けられない邪悪な矢は父に向かった。高齢につかまってがたが来て弱体化したそこを責め立てる、惨たらしい迫害を母は立て続けに加えた。精神病院にぶち込むとまでわめきたてた。母の行動を何としても抑えて父を窮状から救えという声がひっきりなしに男に届いた。町中で何とか維持している家庭までもが壊されてはならぬと父を引き取ることを男は踏みとどまった。佐和子はそのままにして放置はしなかった。ひそかに父の様子を見に実家を訪ねた直後に、あれほど非情で手荒な扱いから救うのは、息子であるあなたしかいないと強く指弾した。村人が息子を薄情だと責め立てる声の底に流れる何層倍もの真心がこめられていたはずだ。

それでもかろうじて生き延びた父に母はどうとう致命的な打撃を加えた。

主治医に説得されて母がやむなく退院を受け入れた大晦日に、下着を脱いで投げ捨てて大暴れしていた父が急に静かになった。男が寢床をのぞくと穴をうがった両眼と黒々としたがらんだ口の口があった。完全に境界を越えた、この世とは縁の切れてしまった変わり果てた人の表情だった。就寝前に一日一錠を服用せよと処方された劇薬を、隙を見て倍も口に放り込んで黙らせたと言母は白状した。

正月明けに二度目の重度の脱水症状による緊急入院となる。明らかに食事を摂らせていなかった、母が食べさせなかったと主治医は重大事を淡々と語った。

言葉に尽くせない艱難辛苦の目に合っている父に深く心を痛め、できる限り寄り添おうとした。時間を見出しては病院に通ってくれた。腕を振るつたひな祭りの色とりどりの散らし寿司を、いつもとは違って少しだけ口にしたその二日後に父は亡くなった。命ある最期を手厚く介護したのは佐和子であった。

引き取り手がいない老人のための病棟の、看護婦詰所の前に置かれたベッドの上で父は息を引き取った。その残生に妻から虐待にさらされ続けた痛手によつて、授かった寿命をどれほど縮めたことか。直接手を下さなくとも、母が父を亡き者にした下手人である事実が変わりはない。

病棟の集会室に安置された父に、すがって泣きじゃくつたのは母でも息子でもなく佐和子ひとりだった。

父が生きていた頃ほどにも町に住む四人家族が訪問しないと気づくや、母の攻撃は酷烈を極め寸毫も手を緩めることなく今に続いている。無理強いしても来させてやると奸計を張り巡らせて屈従させる。急に足払いをかけ不意打ちに背後から切りつける。身も心もずたずたにしてやると翻弄することだけに

醜悪な害心を燃やす。目を覆うばかりの妬心や憎悪を掻き立てては執拗に追いつがる。動く輩の人数が尽きると仮病を装いまんまと入院にこぎつけた。奇襲を受けて、休みのとりにくい夫に変わって最初に駆けつけるのは佐和子だった。きりきり舞いさせられて一時の怒りに流されることはなかった。その時を外さず、母に対して人として踏み行うべき道筋について説得すら試みた。何者かに命じられたからではなく、胸奥の厳かなまでの在り様によつて誠心誠意を込めて行動ができた。佐和子は窮地にある者に対して、あふれるほどにあたたかい衷心からと思える手を差し伸べることができる。

けれども、ひとたび母からの汚濁にまみれた陰湿な仕掛けが届くと、佐和子までもが平穏をかき乱され錯乱に近い混乱に陥ることが多くなった。降りかかる火の粉を払う生やさしい段階はもはや越えてしまった。灰燼に帰す大惨事を起こす付け火にまで踏み切る危難は切迫している。新たに着手する対処法はもはや手詰まりとなり万策が尽きた。実意を尽くす働きかけなどあの母親には何ひとつ善導をもたらさない。抜き差しならない紛争へと必ずや崩落する母との確執。その難事は本当ならば佐和子が引き受けなくても良いものではなかったか。

恩沢を施すかのようにあふれ出す泉の水は、かぐわしい香りをふりまきながら細い流れへと変容し林中に消えて行く。男の目は泉の不可思議な中心点を新たに発見した。たえず揺れ動く感覚が目から体内へと浸潤しては響き渡る。

こうやっていつまでも母に追い掛け回されて執念深く取り付かれるのは、遠隔地へと姿を消さなかったからだ。大学進学を機に育った村を脱出し都会へと高飛びせんと企図したものの、結局は県内の不本意な学部に進むしかなかった。就職先を選択する間口は異様なほどに狭く、望みをつなぐ前途を垣間見る一瞬さえない残り滓であった。

いつの日か世俗を離れんと心中に誓い、悲壮にも家出の機会をうかがっていたという言い訳は通用しない。敢然と反乱を起こして訣別して独立する好機はどの折節にもいくらでもあったはずだ。

実際はこの年になるまで何等目覚ましい変容が見られない停滞続きでしかない。憂き世の難儀に直面させられて引っ張り回され、無為が積もるばかりのどこにも打って出ることのない退嬰的な日々でしかなかった。

教室には人格の陶冶や人間性の伸長といった本来的な場面など、どこを探しても見当たらない。生身の人間のみずみずしい心臓の鼓動に耳を澄ますこと

なく、それぞれに天と地ほども異なる家庭という檻の中で身もだえするなまなましい姿態を誰も想像す
らない鈍重な空間であつた。

一日の三分の一を安値でも売却して渡っていく。
そんな目論見はすぐさま外れ、自由な時間を奪取す
ることを諦めざるを得なくなる。結婚して子供が生
まれてからは、家族のために働くという当初には考
えもしなかつた目標が生じ、あろうことか張り合い
に似た何かさえもが芽吹いた。さらに、この役職に
就くと誰かが気まぐれに指差した方角に取り換えが
いくらでもきく芥子粒は飛ばされる。

けれども、たつた今、唐突に男に変事が出来した。
またたくまに分厚い黒雲に覆われて大波乱を予感
させた空模様が、あつという間に晴れ渡つた。埋み
火が死灰の下から蘇えつた。真つ赤な炎となつて勢
いよく燃え盛っている。

それは、決して動揺ではなく、心の奥深くから湧
き上がってくる底力の如き動力そのものであつた。
狂騒とは真逆の、身体中に精気がみなぎつてあふれ
る偉大な変革につながるかもしれない、たち騒ぎで
ある。

その声の発生源が奈辺にあるかは見定めがたいも
のの、自己を頼みにして生きよという啓示に近かつ
た。否定や自罰に絡め取られ屈託して思い詰める自

己こそが一人立つ孤墾となる。

親鳥の手元を離れたばかりの幼鳥が初飛行を難なくやつてのけ、その上見事な飛翔を長く続け、たちまち彼方へと遠ざかり点となつて消えた。

成虫となつてからは悪環境で日を重ねいよいよ寿命が尽きかける頃に、複眼が先鋭な認識力を備えて人間界の本然までをも悟達したそのトンボは、銀ねずの渋い色合いが一層神々しさを増し悠然と比類なき姿で飛んでいる。

どこまでも自由を渴仰する精神が激しく燃えている。俗なる生の基盤をひっくり返すほどの破壊力を秘めた、どこでもないかの地への強烈な憧憬はますます強まつていく。

今しがた、遠く奥山で大地震の前兆の如き大鳴動がとどろいた。手つかずの森が荒々しく猛る山鳴りに違いない。信じられないほどのどでかい青嵐の到来だ。案の定、騒乱のただ一撃によつて男は地べたから引き剥がされてしまう。気がつくと、薄っぺらな紙や落ち葉そっくりに、林中の思いもよらないあちこちを右往左往している。いつしか、岩山の前面に立ち至つた。突如、生温かくて湿った空気に抱きとめられた。それまでとは異質の暗転へとがたがたと落下していく。後退りして岩山に穿たれた繭の形

をした洞窟の内部に入っていた。

ほら穴の暗がりの中を行方定まらない歩を運んでいる。暗然へとどこまでも沈む重ったるい心身は、いかにも危なっかしく揺れ続けていた。と、清冽な水音が背中を鋭く突き刺した。ふりむくと、傾斜を素早く流れていくほの明かりに照らされた水流がくつきりと目に入った。

あの夜に佐和子は男の喉元に鋭利な切っ先を突きつけた。ひりひりと切なる痛みが呼び覚まされる。積もりに積もった悲憤をついに思い余って吐き出した。陰惨な行為へと真っ直ぐに結びつく禍々しい情動の発生源をずばりと指摘した。

格別に柔らかかで壊れやすい心を持つ我が子を、唐突にこっぴどく叱りつけて手をかける。鬱屈した情念を衝動的にぶつける暴発には抵抗する術もなかった。身体を張って止めに入っても時は既に遅く、暴力の刻印は癒しようもない。こんな家を今すぐにでも出たい、父親とは一緒にいたくはないと息子の切ない訴えを聞くことほど辛いことはなかった。

あなたの奥深くに巣食っている、はなはだしく捻くれた虫食いこそが大元なのだ。それこそが、今なお続く辛酸であり重荷だと佐和子は悲しげに非を打った。生みの母とそっくりの底意地の悪い目つきと声色には寒気立つ。この率直で正直な指點こそが、

この度の断絶へと続く真の原因ではなかったか。

寛恕を請う暇も余地もまるでなく、男はどこにも立つ位置のない苦境の崖っぷちに追われた。あの時こそが心根の修正を真剣に求める最後通牒であった。懐に息子を抱きしめて何としてでも守ろうとする佐和子の訴えに耳を傾け、真摯に根本から変えようと努めた。その途上で、唐突にぷつぷつと通い合う小道は閉ざされた。

さらに、佐和子の直撃はそれから幾日も経ずに追い討ちをかけてなされた。「まだ懲りないの」という痛切な非難は過たずに急所を抉った。

同僚は誰もが戸建ての住宅を構えているのに、五十歳に近い年齢になってもなお、男はやむなく勤務先近くの借家を転々としていた。一方、佐和子の方は残り時間はとても少ないと切羽詰って、ある朝突如家が欲しいと口に出した。困り果てて母が住む家の隣地でもやむを得ないと男の口からつぶやきもれた。その一言が、決して触れてはならない佐和子の逆鱗をひどく刺激してしまった。「まだ懲りないの」。思いつきであつても金輪際あり得べからざる着想をするとは一体どうしたことか。よりにもよつてあんな因縁含みの穢れきった土地に未だに執着を持っていたとは。新築にまつわる対立の大元には複雑な子細が蟄伏している。ぐずぐずと見苦しい弁解

でその場を取り繕ってはみても懸隔は広がるばかりだった。

外界へと導いていくはずの鮮烈な水の流れからはどうに訣別を宣告された。洞窟のどの位置にいてどの方角に向かうのか皆目見当もつけられずに暗澹に落ちていく。前途を照らすものがないその底で、男は慙愧に泥まみれになった姿でうずくまる。

肺腑を抉る二つの鋭利な指摘を差し向けてから、辛抱強く幾月か待ったうえで佐和子は遮断へと進んだのだろう。その間に男が取った行動はひとつしかなかった。熱暑を予感させるその朝に、罪業深き男は佐和子には内密にして故郷への巡礼に出立した。

川の向こう岸に立つ数本しか残っていないニセアカシアの削がれた枝ぶりは著しく均衡を失し、衰退の極点へと向かっているのは隠しようがなかった。どんよりと淀む汚濁の腐敗臭を吸い込むのはひどく辛い仕儀でしかなかった。白い花房と魚の銀鱗がきらめく幻が目の前を通り過ぎる。見る影もなく荒れ果てた大川に向かって、汚穢を垂れ流してでもいるのかと醜い痛罵を浴びせてしまった。

そこには日の光の一筋さえも届かない。人の手が入らずに荒れるに任せて捨て置かれた万物は急速に廃亡へと下降していくばかりだ。ホタルが安らぐと

いう可憐な花の気配はどこを探してもどこにも見出すことはできなかつた。

苦心して育てた近在にはない珍しい種類の果実をもいで子供に手渡して共に口にする時、父は満ち足りた最上のひとときだと誠に誇らしげだつた。今やそうした木々は影もなく朽ちてしまい、切れ切れの残骸としてさえも姿をみせず、押し寄せた竹林の獯猛な力に踏みにじられていた。辺り一帯を原野に帰さんと虎視眈々と狙っている。

裏側から実家を見下ろすと、敷地内には不燃ごみや粗大ごみにあたる廃棄物が何年分も投げ捨てられて山となり、ごみ集積所の如く散乱していた。炎天下にあつても乾くことのない濁った水たまりがどぶ泥の様相を見せて、小沼に変わじつつある。

たった数分間だけでもそうした醜状を見ているのはひどく胸が痛むことであつた。

母の住む宅地の片隅に新築するなどという取り返しがつかない思いつきが何故に湧いてきたのか。胸奥にまたもや悲傷の波が立ち騒ぐ。

あの酷熱の一日、どの地点においても次々に突きつけられた手の施しようのない惨状によって、男の胸奥に潜む故郷はことごとく撃砕された。時にきらめく故郷の淡い虚像を、あきらめきれずに未練がましく作出しては希求し続けてきた。

この真つ暗な洞窟の底で、そうした弱々しい心底のありかに対して、厳しく自制を求めて封印しようと再び決意を固める。しかしながら、遅きに失したと激しく地団駄を踏むような忸怩たる暗鬱にすぐさま襲われた。

薄闇は渦巻きながら不穏な動静を一層強めている。投棄された黒々とした物体が転がっていた。腐敗が進んだ生体の末路にも見える。男は手足をもどもぞと動かし始めた。ここに至ってもなお、歪んで荒んだ自らのしわがれ声にばかり気を取られて漂浪している。自己保身と利己心にまみれた耐えられない汚臭を発しているに違いない。

―ひとときわ鮮やかな五弁の純白の花弁が、小さくともくつきりとした輪郭によつて巨木にも引けをとらない威容を示している。近寄りがたいもの悲しい情調をたたえて、木の下闇に輝いていた。―泉の清明なささやきは、深い悲しみの陰影によつてかえつて林中の万物を虜にして、最高の敬意をもつて遇されている。―地味が痩せ衰えて行く土壌の悪条件下にあつても一向に衰弱することなく、古種のアヤメは今年もまた凜呼とした美しい姿であたりを払う。

そうした万象の立ち姿の如き佐和子のほのかな声にひと度たりとも真剣に耳を傾けたことはなかった。

そこにはその人を形成するかけがえのない基調音が、そこはかとなく響いている。

三人姉妹の長女は小学校入学を控えたある日、祖父母の元に預けられた。立派なピアノの先生に習わせてあげよう、キリスト教系の私立小学校に通わせてやろう。手が届かないと思っていた燦然と輝く別世界へとふわふわした気分に乗って家を離れた。

父と母が祖父母から勘当扱いを受けて、知る人もいない土地で種苗店を開いたばかりの頃だ。暮らしていけるだけの売り上げを稼ぐには遠く及ばず、店を上昇軌道に乗せる見通しは全く立たないその日暮らしの暗黒時代であった。客を接待すると称して、父親が真つ先に遊惰な暮らしにはまり込み、安酒場か花札の博打場の雰囲気へとどっぷりと沈んでしまった。

子供たちの居場所はどこにもなかった。

三月がたちまち過ぎて四月に入っても入学手続きをしないことを不審に思い、祖母に質問をした。すると、婆ちゃんの家にはお金がないから私立の小学校には行かせられないという、取りつきよのない返答だった。

男は、あたりかまわず泣き叫ぶ、佐和子なのか自分なのか区別がつかない姿を想起しては胸が張り裂けそうになる。

その頃に写したただ一枚の写真を佐和子は何よりも大切にしていた。可愛がつっていた愛犬のクロを膝の上に乗せているからだ。オカッパ髪のきれいな目をした幼子がこちらを見ている。色の白い賢そうな整った顔が、はにかむように微笑む。

ただ今ここで、まだ幼くてさびしげな佐和子を交々の哀切な万感をこめて、男は精一杯やさしく抱きしめる。けれども、腕の中には生きている者の重さもあたたかさもまるでなく、ひんやりとした空疎な手応えが返ってくるばかりだ。

子供のやわらかな心からうるわしい希望を釣りだしたうえで打ち壊した。日々の修羅場から逃れたいという幼き者の切ない願望を足蹴にした。

落胆の奈落の底からどうにか気持ち切り換えて、この家にいるしかないと幼い諦念に自身の位置を定めた。ついこの間まで暮らした狭い家には入る隙間はもうなかった。

洞窟を引き回されるうちに見失った水の流れが、すぐそこに接近している。小躍りする弾む音色は手の届く範囲だと知らせる。だが、いつまで経っても全姿どころか指先さえも見せてはくれない。

佐和子がじいちゃんと呼んだその人との間にはいっしか心が通じ合い、切っても切れない情愛が育まれていった。けれども、佐和子が祖父の葬儀に列席

することを祖母は頑なに拒んだ。陰になり日向になり後ろ盾となつてくれた祖父が亡くなると、祖母は事あるごとにねちねちと執念くいたぶつては棘立つ攻撃を一層強めて痛めつけた。

陰惨な気がこもる暗い家から飛び出しては、鉄路の踏切のすぐ近くに立つことが重なる。巨大な鋼鉄の車両が大音声で呼びかける凶暴な誘惑に抵抗し、飛び込むのは今だという衝迫をやつとのことで抑えた。家にたどり着くとそこにしか居場所のない湿つた寢床にもぐつた。そして永遠に終わりの来ない続きのように泣き明かす。

家出を夢想したり、どこかで両手をいつぱいに広げて待つ優しい誰かの胸に飛び込みたいという、おおよその子供なら持つはずの願いは一度たりとも浮かばなかった。

幼い佐和子をもてあそんだ残酷としか言いようがない貫い子となつた一部始終。祖母との辛い日々。こうした実情の委細を明かしたのは、争いのない温和な幸せに包まれた深更であった。私には戻る家はない、あなたと住むこの場所にしか居所はない。

佐和子の心の奥深くにひそむ不安のひとかけらさえ明敏に察知できなかつた。何をさておいても大切にするべき悲願をとうとう叶えてやることはできなかった。細々とながらも、かろうじて懸命に紡いで

きた生への預望を男は踏躓したのだ。

父親と祖母が相次いで亡くなり、店は佐和子の母が細々とながらも維持していた。狭小な土地ではあつても、祖母が住んだ跡地に新築したいと内々に考えを固め、佐和子は秘かに望みを育んでいた。母親が商う小店から数歩の距離にあつた。

けれども、母親を助けて店を継ぐことも、その場所に建築することも両方をともしどもに男は猛烈に反対した。ことごとくに異を唱えた。それまで送ってきた二人の生活の中で、最大の対立地点で決して譲ることなくにらみ合つた。

遠方から週に三日だけ通う立場でも、実質的に店を取り仕切っているのは佐和子であつた。けれども、母親は感謝を示すどころか店主だからと益々横暴にふるまっている。加えて娘をずっと格下の赤の他人の店員のようないさえしてはばからない。ぞんざいで粗略な扱いがますます悪化するばかりではないか。あれこれの佐和子の不満を真に受けて、聞いた当の本人に並べ立てて言い募り、その地に家を建てることも店の継承にも不承知を通した。

さらに、男は一層取り乱して、言わずもがなの事までを引きずり出して言い放つた。

どうして我が子をくれてやったのかという疑問に

対して、考え付いた答えの数々だった。貧しくとも生活がいかに困窮しようとも、我が子を真つ先に手離す親の行為はどんな重大事が起きたからなのか。両親の間に一番最初に誕生した愛娘を物同然にくれてやるとは。やむなく預けたと公言するなら、どんな口実を作っても可愛い我が子の顔を見に行くはずだ。その幼子が生死をさまよう床に伏せていても、母親が駆けつけることはなかったというではないか。特に母親には人の親として根本的に欠ける部分があつた。人非人としか言いようがないとまで断じた。

いつもならば、誤謬に対して些少な事実誤認をも許さない佐和子はいつまでも沈黙を保っていた。大きく開いた目の淵ににじむものを男は見逃さなかつた。

夫と客の世話に明け暮れ借金取りの対応まで押し付けられた。泣き騒ぐ三人の娘たちを叱り飛ばして外に追いやるしかなかった。小さくて幼い娘を放り投げたのでも見捨てたのでもない。利発なこの子供なら親元を離れても道を踏み外すことなく立派に生きていけると考えた。いや、本当の所は困窮の底で荒れるばかりの家の中から、子育ての手間が省ければ少しでも助かると救いの手にすがつたのだ。佐和子の問いに、対してそのように母親は折々に弁明したという。けれども、そこまでは納得するとしても、

やむを得ない星回りの下でどれもこれも生きていくためには仕方のない選択だったとする結語を佐和子は承認して許すことはできなかった。

横暴で身勝手に利己的な親だとしても、人でなしとはいかにも言い過ぎだった。母親の行動の見方には実は大きな食い違いがある。男の母親と同じ醜類はこの世には数えるほどに少なく、化け物同然の姿を投影するのは大きな間違いだった。

ひやりとする湿った空気に襲撃されて男は身震いする。そして、今の今まで佐和子とこの上なく親密な会話を交わっていたかのような錯誤に、はつと気づいてしまった。

突然白い光が男の全身を激烈に照射した。とうとうほら穴からの脱出がなくなったのだ。嵐はぴたりと静まっていた。こちこちに凝固した身体の結ぼれがほどけていく。

吹き渡る薫る風。鳴き交わす小鳥の声。ささやきあう匂い立つ枝や青葉。どれもが哀切きわまりない反響によつて、男をしたたかな悲哀の淵へと連れ去っていく。

佐和子はひと言たりとも言葉にしたことはない。祖母の暗い部屋でも、学校の行き帰りにも呟いたことはない。親しい友達にも、身近で寄り添ってくれ

た祖父にさえも明かしたことはない。男に対しては切ない暗示としてほのめかしたことはあるかもしれない。その時と場所をもはや特定することは不可能だ。

生まれるとすぐから、佐和子は母親のあたたかな懐でしつとりと愛でられたことはない。まだ幼い年頃に捨てられたも同然に祖父母の元に預けられた。

佐和子がひそやかに母親に呼びかけるささやきが耳に届く。かなわないものといつも諦めている母親への思慕がにじむように湧き出す。心優しい祖父が支えてくれたとはいえ、母親の代わりを果たすことはついにできなかつた。

うって変わって穏やかな空気がゆつたりと渦巻く山の斜面を男は駆け下りていた。細々とした望みはとうに絶たれ、異色の森の高みを目指す意力は消滅していた。地面に近い場所でせわしなく動きまわる生き物までが、しきりに下界へといざなっている。

どうやっても阻止できない地滑りのように、佐和子との間は破綻へと崩壊し続けている。

男の母親の常軌を際限なく逸れていく行動は、過激な破壊力を増し収拾は考えられない領域に突入した。修正を求める数多の試みはついに敗北した。いかに頑強な佐和子とはいえ、持てる力を使い果たし精も魂も尽き果てた心境に陥っているのだろう。

男の内面の奥まった部分にこびりつく、生得的なうえに成育歴によって深く刻印された歪んだ性根。それを前にして、改良や改善を加える見込みはどうにも立たないと佐和子は自身を納得させていった。

けれども、断絶へと決めて行く最大の動因は老いていく母親と共に残り少ない日々を過ごしたいという一念ではなかったか。片目はとうの昔に失明していたと改めて診断を受けその上膝や腰をも痛め、同年齢の誰彼よりもめつきり年老いていく母親を佐和子はとても気にかけていた。

一途に恋焦がれていたのは母親の手元であった。母親の傍に住みたいという年来あたたためてきた切実な願いこそが全計画を率いてきた淵源なのだろう。新築場所を決めるための合理的で筋の通った理屈は始めからなかった。

しかしながら、物事の本質を直視できる佐和子は現実に生きている母親の姿がうるわしいものだと憧れを抱いたことはない。母親なるものが実在とはほど遠い幻影でしかないとは知り尽くしていよう。

それでもなお、母親の傍らに住んで手を取り合つて暮らすことによつて、淡彩ではあつても何がしかの手応えを我がものにできるといふ考えに至つたのだ。修復や回復ではなく弱り切つたその人の世話に明け暮れることで、母親代わりを務めようと思ひ定

めたのだらう。こうした男の独自の見解に対して、林中の万物は大いなる賛意を表して一斉にざわめいている。

しかしどう考えてみても、老いた母親への切々たる思慕はどこか均衡を欠いたものに思える。脆すぎる危うい地点に立っているのではないか。早晩失意に終わるのではと危惧にからめとられてしまう。夫との別離という決断は果たして十二分な熟慮を重ねて導き出した結論なのか。大事な子供の進路を見据えたうえでの将来像なのか。

そうした疑義は、あの母親の子である男の僻目や偏見から発したものに他なるまい。捨てられる身の輩が嘆きのあまり、眼も心も湿気に曇って追いつけまいとしている。

とにもかくにも、佐和子は自らの意志によって近未来を切り開きたいとする方向へと踏み出した。

そうではあっても、相次いで湧出してくるのは、逃れようのない生老病死にまといつかれながらも辛苦をかいくぐってきた二人だけの時間であった。忘却の淵に沈めた万般が目の前に次々と出現する。白日のもとではいかにも痛々しい。特に佐和子はどの難問をも恐れることなく傷を負うことを考量することなく、ひたすら前へと足を運んだ。そうして少しずつ間道を切り開いては掌中にした狭隘な居場所。

ようやくそこに至り、取るに足りなくとも希少な安堵のひとときを得て、ほつと小さく息をついた。

けれども、到達した場所やその時が再来するようどれほど熱心に乞い願おうとも、永久に巡り合うことはできない。

ひしめく常緑樹の間隙を縫い小道が湾曲を繰り返しては下方へと導いて行く。斜面を下る一瞬間に大河は鋭利な片言を男に突き刺した。すぐさま抑圧の下層へと封じ込めた。

飛び切りの恐懼にわしづかみにされ、大あわてで忘失のはるか遠方へと追いやった。

終着点は波が繰り返し砂をたたく岸边だった。覚束ない動きで体を支えながら、林を背にして川岸に立った。水に対峙すると川は背丈よりも恐ろしいまでに高く見えた。濁流かと思紛う水が砂を荒々しく噛んで削り取り、見る間に足元をさらう。

山中を引きずり回されて歩み、泉の静穏をゆつくりと味わう暇もなくほら穴の暗闇に放り込まれた。暗中で彷徨を強いられているうちにこの岸边へと導かれた。

その道行のあらゆる場所で見せつけられたのは、何ものかが壊滅的な打撃を加えた後の惨状であった。現世に抛って立つ基盤も、踏みしめる堅固であるべ

き足場も全ては蹂躪された。心の片隅にかすかに棲みつく天上的なるものへの渴仰さえもが踏みしだかれた。

佐和子に手を差し伸べる解決策があるとはもはや信じることはできない。不条理な混乱状態は固定化された。

男は水際から数歩身を引いて砂浜を歩き始める。たつた今発見したサイコロの形をしたとてつもない大きさの岩石の方へと足を進めていく。その場所だと聞いていたとおり、岩の山側には石地藏が立っていた。氏名が刻まれた水難による死者はごく少数で、記名のない入水した多くの人たちをここに來て悼むのだという。

サイコロの石を目印にして真つ直ぐ川に入っていけば、深い淵が確実に体を抱き止めて天国へと導いてくれる。祖母は数年前に、嫁いだ姉と生まれたばかりの赤ん坊はつい最近その淵からあの世へと旅立った。居残りの学習時間を少なくするために高校二年生が提供した話題と承知しながら深追いをしてしまった。少年の三人の近親者もまた、不幸に落ちた死者を責め苛んで断罪する村人の噂の嵐に見舞われた。祖母は嫁である少年の母親との暗闘に敗北し夫にも裏切られ、家の中には居場所がなくなった。会社勤めの同僚同士で結婚したものの農家の後を継

ぐことになった線の細すぎる夫は、土と泥にまみれて暮らすことにほとほと嫌気がさして、赤子を生んだばかりの新婦を置いて出奔した。そうして姉もまたこの世に座る席を失った。

先刻林中の斜面を下る時、男の心臓と脳髓の中核を射程にして大河が冷やややかな痛撃を食らわせた。束の間抑圧の下層へと押し込めた。けれども禍々しいうごめきはやまずに絶えず脅かし続けていた。核心を貫いた大河の声は、自らその身を消滅させよという慮外なものであった。

夕暮れの薄闇に人型をした濃色の黒い穴が穿たれている。男は手強い泥濘に足をからめとられたかのように、砂地にただ一步を踏み出すことにさえ難渋してまたしても立ち止まる。想像がつかないほどの難路を長いこと歩まされたせいで、とうとう生への執着を手離してしまった。生きんとする意欲の根幹が致命的な損傷を受けている。手招きする人や後ろから押してくれる者も一人としていない、物凄まじい孤立無援の狭間に立ち尽くしている。

ぐらりと前に傾いた身体を薄っぺらな足先で支え、よろけながらも一方の足を踏み出した。入水した死者が集う石地蔵の傍らから少しでも離れようと努めているのではなかった。迫り来る大河の急速な増水を避けようと岸辺から遠くへと逃れていくのでは

ない。

世のしがらみにしつこく追い回された末に汚辱にまみれた身を、無のしじまに投じようと決めたのではない。自らを消滅させよという刺々しい死神の言葉を堅苦しく四角四面に受け止めて、思い屈しているのではなかった。

ただ、底意地の悪い死神の横顔をしばしば見せつけられた体験はあった。我が身を犠牲にして母親に生涯を捧げて恩返しに励め。さもなくば死あるのみとする寂寞たる一念を明視した。我が子の肉を食い散らかしてでも、自身の生のみを貫徹しようとする寒々とした獣心をまざまざと見せつけられた。それこそが、冷酷無残な化け物に変じた死神の正体だった。

母親こそが少年の前途に立ちはだかるすこぶる厄介な障害であった。心の片隅に芽生えた自由への希求を毀壞してはにんまりとする。何もかもを破壊する強圧の行き着く将来を予感して激しく身悶えて反抗を開始した。母には断固として絶対に従わないという激烈なまでの反逆感情が猛々しく育っていった。たとえば、幼弱であっても、身の丈を越えた途轍もない情念こそが敗滅に帰していきそうな危うい生存を支えた。以来、向う見ずに遮二無二ことごとくに反対を押し通そうとする無方向性の敵愾心こそが、と

もかくも生き延びる方向へと導いたのだ。

家庭の破綻は目に見える裂け目をさらけだした。男だけがその輪から外されている。職場では雇主との約束事を通り一遍に果たすだけの虚しい限りの時間を費消していた。大事な仕事だと勢い込んで力説する連中からは、荒れ地に追いやられ遠ざけられてしまった。生まれ故郷を放逐されて久しく、昼日中に村に姿を見せることもできずに締め出しを食らっている。

俗衆と手を取り合って歩む円満な境涯から弾き飛ばされた。この世の埒外に生息する不屈き者の扱いを受けている。ついに多数者から迫害を受ける異端者になり果てた。

見捨てられた屑物はあまりに感傷的に過ぎる落胆や失望の空々寂々たるただ中に佇んでいる。まぎれもない一人ぼっちの孤児として、ひっそりと孤愁に打ち震えている。うつとうしく絶えず降り注ぐ雨に打たれて悲哀で全身がずぶ濡れになっている。

そうした痩せ細った情動に溺れてしまつて立ち止まり、そんな繊弱なひと所に拝跪してはならない。潤な全領分を一足飛びに通過せねばならない。

それにしても、かえすがえすも無念でならないの

は佐和子が母へと回帰していったことだ。吃驚するほどに取り乱して母親に食ってかかる姿を男は幾度も目撃した。実の母親に対する痛烈な言動や反乱をみるにつけて、母を共通の敵として共に闘っていると信じて疑ったことはない。

けれども、佐和子と母親の間の争いは尋常な通有の親子関係の範疇に属していると認めざるを得ない。男の母親は異次元界に住む言語に絶する異類であつて、佐和子の母親と一緒にすることなどとてもできはしない。

しらじらとした物悲しい空無の中に投げ出されている。とうとう男一人が取り残されたという悲傷に彩色された残渣が、刺激的な痛みを伴って胸奥深くに沈んでいく。

大河の流れを大きく左右する川上の一地点で、巨大な砲声の大音が発せられたことに男は全く気付いてはいない。立つ位置は安心できる地帯まではまだまだ遠かった。

林中のただならぬ気配も後方にさし迫る濁水の叫喚も何ひとつ感受できない。

と、その憔悴しきつた男の背中をどんと押す衝撃が加わった。衝突されてはずみがつき、後ろを振り返りもせず首を回して見返りもせず走り出していた。

山の斜面のうねくねした小道をたどることなく直線を引いた最短の距離を上へ上へと登る。顔前にふさがる葉を手で払いのけ、もう片方を木々に手をかけて進む。腕や手は傷だらけで掌にはぎつくりと深い傷が刻まれた。胸元や脇腹にぶつかり足を払って引きずり倒そうとするしたたかで重い打撃を痛烈に受けながら移動する。

すぐ背後に激流が襲いかかってきた、その重大事によくやく気付いた。すると全身の精力はぱたりと途絶え仰向けに倒れてしまった。抵抗も悪あがきも、もはやこれまでだ。あとはどうなるうとも寸分たりとも身体を動かすことはできない。生存の域外から届いたかのような荒々しい喘鳴が延命はかなわないと告げている。

背中を打ち付けるごつごつした感触は岩だ。はじけては目と頬を濡らすのは清らかな水の滴だ。一人で生まれ、たった一人で死して終えるのが人間の生涯だという。

水滴がしぶきとなって顔に打ちかかり唇をも湿らせる。あの林中で遭遇した神泉の如き清冽な水が流れゆく懐かしい匂いだった。天涯に孤独な生き物として一人で立つことこそが生存の本然の姿だ。途切れ途切れに思いもよらない思念が湧いてくる。

遠く手つかずの森に源を発し細々と途絶えること

なく流れを手渡し、ここに至って白い滝となつて大河に注いでいるのだらう。その水は懸命に男を刺激し覚醒を促そうとしている。何ものの制約をも受けずに、せめて内面の自由たる何かを定立したい。深奥に埋もれているはずの燃えさしに火を放つて激しく生きたい。

濁水は滝が落ちかかるすぐ近くにまであふれてきた。轟音が耳をつんざくほどに高まっている。それまで目にしたことのない見渡す限りの激流の狂的な有様に驚愕している。

一刻も早く危難から遠ざからなければならぬ。足を引きずつても手をついて身体を這わせてでも、更の上へとこの身を運ばねばならない。

雪国とはいえ、この時節に初雪が襲来するのはいくら何でも早過ぎた。昼過ぎからちらつきはじめた白いものは降るなどという生やさしい表現を通り越して、この僻村における厳冬でさえ滅多にない本格的な降雪に転じた。

晩春のあの日に男は山中に踏み迷いさんざ玩弄された時から半年近くがのろのろと経過した。佐和子との間はがつきりと膠着状態が固定したままだ。ただ、燃え立つ炎の影を見る瞬間は確かにあり、新た

な変容へと向かう予兆かもしれないなかった。

国道を挟む駅の向かい側の店で見張りをするように駅の出入り口を注視している。

手袋をはめしつかりと身を固めた娘が登場するのだ。防寒着の色合いは黒か地味で目立たないものに違いない。男の娘の顔立ちはますます佐和子に似てきており、声もまたそっくりでどうかするとちよつとしたしぐさまでもが瓜二つだった。

娘から手紙が届いてから返信すべきかどうか迷いに迷い、寒さに十分耐えうる服装をと言葉少なに付け加えた。住んでいる市とこの豪雪地帯ではあまりにも気候が違い過ぎて、いたましいほどの軽装で駅に降り立つかもしれない。

どんな表情で娘を迎えどう言葉をかけてつないでいけばよいのか。乱高下する激しい動揺に繰り返して揺さぶられていたたまれない心地につかまり、ついにまともには対面できないと逃げ腰になった。

年頃になっても娘は父親と二人で外出することを嫌がらなかつた。父親にはどうしても近づきたくないと、遠巻きにして冷ややかに眺める息子と同様のつらい態度はみせたことはない。

白色というのではなく、無数の銀色の太い直線が上方から下方へとひっきりなしに地面に突き刺さる。駅舎も駅前の広場も消滅したかのように見えなく

なつた。

来春には祖母が住んでいた古い家に三人で転居すると決めたこと。ふたつ目は店を継ぐのは佐和子だと母親の裁定が下つたにもかかわらず、妹がひつくり返そうとなりふりかまわぬ攻撃を仕掛けていること。そう手紙には認めてあつた。かつて鬱々と痩せ細つていった妻の姿を思い起こして胸が詰まり、やるせない気持ちでいつぱいになつた。

しかしながら、男にどう対処してほしいのかは一切明示されてはいなかつた。

記した二点の用件だけで済むのなら、この辺陲の地にまで遠路を訪ねてくる必要はない。娘は佐和子の単なる代弁者ではなく、自身の声で父親に伝えた大切な事柄があるはずだ。心を込めて真正面から理解を求めたい。そこには、可能ならば新たな行動を促したいとする大切な言葉までもが含まれているかもしれない。

降りしきる雪に阻まれて大層難儀しながら男は駅に向かった。―生まれるとすぐに娘に黄疸が表れ顔の腫物もいつまでも消えずに、医師の心配がないとする言葉も耳におさまらずに二人でいつまでも気にやみ続けた。―なぜか、幼少の頃より猫が好きで、始めて飼つたシャム猫を上手になつかせて、人形用の小さな乳母車に仰向けに寝かせて歩いては大人た

ちを驚かせた……次々と浮かんでくる娘のどんな姿もいとおしく、あまりにも激しく胸を揺さぶり自らを支えて立つことさえ困難になっっている。

列車は積雪のために運休となった。どれほど長い時間改札口で待っていても娘は現れることはない。会うことを本当は怖れていた。けれども、会うことを心の底から期待して待ち続けていたこともまた偽りのない真情だった。

娘に会えるのは今回が最後の機会だ。願ってもない好機を逃したからには再び巡ってはこないだろう。いや、娘が遠くこの地を訪ねてまでも直接父親に話そうとした内容をまだひとつも聞いてはいない。そのように弱々しい声が寂しげに響く。

尋常ならざる激流の如き速さで降っていた雪は少しずつ弱まり、時折さらさらという音に近い降り様へと変化している。

風が吹いてはいないのに、遠ざかる男の後ろ姿に呼びかけては何事かをささやきかけるように、雪はしきりに振りかかる。